一路居士

雜染畫集併記

56

特259
302

始

ヤ 239
302

序

妮古錄といふ書に、「黃大痴といふ人は年九十にして、容貌尙童子の如く、又米友仁は年八十有餘にして、精神も確に、眼力も明かに、身體も强健なりき、是は要するに、畫中の煙雲供養なり云々」とあり。蓋、畫は以て、人の情を怡ばしめ、心を慰むるものなればなり。

一路居士は、余が忘年莫逆の友なるが、其作る所の畫を寫撮印行し、以て同好に頒たんと欲すとて、之を示さる

予之を觀るに、居士の畫は、世俗の所謂繪かきの畫と其撰を異にし、觸目關心皆直に畫となりて筆に落ちしものなれば、一幀々々其趣を異にし、其形を變じ、觀る者をして送迎に暇あらざるの思あらしむ。是に於てか余は居士が賴みもせざるに、否居士は他人に題辭など書かしむるは、啞者苦瓜を喫する的の人なるを、百も承知の上ながら、餘りの面白さに此題辭を强沾せり。そは此畫帖を觀る人をして、座ながら山水に遊び花鳥を友とし、悠々自適心を慰め神を怡ばしめ、以て彼の黃米二人者の如く、壽而康ならしめんとの婆心なり。

但恐らくは、斯る落筆遒渾韻致幽趣なる、此畫に在りて、佛頭着糞の觀あるを。居士請ふ恕焉。

昭和八年癸酉仲秋月下に於て

七十六翁　長松軒主白眼識

第三千番の觀音畫像に題す

觀音の畫を店頭に掲げ、これを所望の人に貰つて戴く事は自分の此の頃の生活では重要な課程と爲つて居る。觀音を書く時のみは自分も先づ以て淨心で有り得る、それだけでも充分に意義が有る、まして此の畫冊を出版する間際に遂に三千番に達し得た事は私かに喜悅の情の禁じ得ざるものがある。

四年程前に、不圖自分のかいた觀音を人に貰はれたのを機緣として、次々に貰ひ手が有るに隨つて畫いたのが積りつもつて今日に至つたものである。今後とも希望者の盡きない間は又自分の命の續く限りは、一枚でも多くかきたい希望で居る。誠にこれは懺悔の爲めの鑑であり、稱名に代ゆる方式で有る。此の觀音畫像を外にして、折に觸れ、時に感じて、山水を畫き又花卉を作るのも、此の意味に於ける別方式に過ぎないものと私には考へられる。

一路居士合掌

序

一日訪和風堂。案上有撮影畫片三十余頁。皆是主人。馬居士。商務劇中。觸時隨緣。以精進筆。刻意之作也。余披玩反復。興趣湧然。不覺時移。居士告余曰。近日將爲册出而問世。公爲我序。余曰醫者難療近親之人。畫者難描近親之人。今余與居士亦酷似之。以讃乎近阿。以罵乎似慢。不若連搨默々。愛玩終日。居士曰。不序亦可。遂書其語。以代序

香道人　壽識

自序

去年壬申から今歳癸酉にかけて、卽ち第二回の個展、有漏集の出版の後、約二年間の畫を蒐めて此の册を作つた。此間内には長女の發病より其の病歿、之れを外にしては所謂非常時に際し、世上益々多事、思想混迷、其の歸趨を知らず。草莽の布衣と雖も、慨世憂國の意氣無きにしあらず。如何にせん淺學菲才の微身、止むを得ずして一切の憤情を、一本の筆管に托し、世の種々相の我が腦裡を染むるまゝに、時に詠じ、且畫がきして來た。人の乞により て作りたる畫は數百枚に及ぶが、中に就きて製作の動機内に動き、發して稍畫となりしものは此册中の貳十余幀に盡きて居る。

もとより是商沽賤業の餘瀝、世に著すに醜なるを知らざるに非ざれども、知已の溫言に馴れ、市井の厚顏を致して恥を忘れ、自ら雜染畫集と題して敢て之を影印に附した。啓蒙示敎の勞に咨ならざる江湖君子に俟つ所以である

昭和八年十月念五、招魂祭禮の煙火爆聲をきゝつゝ

一路居士識

回向

一、寂かなる光の國の、　　み佛の大慈大悲に、
　はちす咲く蓼の上に、　　御法聞く乙女は先の、　　わが兒ならしも、
二、白雲のたなびく處、　　み光の照らす精舍に、　　わ兒への回向ならしも、
　漏れ聞こゆ讀誦の聲の、　　これやこれ逝きし、
三、あかき灯は劫火あざむき、　　うつまける都の巷、
　宿業の盡きせぬ僅に、　　疲れたる兩手あはすは、　　みちびきらしも、

(1) 秋天吟行

昭和四年の頃であつたか、行樂の秋を他所に、相變らず、丸ビルの店舗裏にくすぶつて、煙霞に戀々たる思ひを、ふと筆をとり書き損じの色紙の裏に、天高氣霽の紙上散策を試み始めたものであつた。心は何時の間にか、水墨の秋氣を滿喫して恍として、熱沓塵裡に在るを、暫し忘れて此一小幀を圖した。

題して秋天吟行といふ。

爾後數年、店舗商品堆積の間に、塵埃にまみるゝに任せてあつたが此頃取り出して見ると、漸く我ながら愛着を增すのを覺え、且舊作必ずしも、後作に劣るものに非ざるを思ひ、存錄して今後の鑑戒と爲さんと思ふものである。

(2) 山招水待

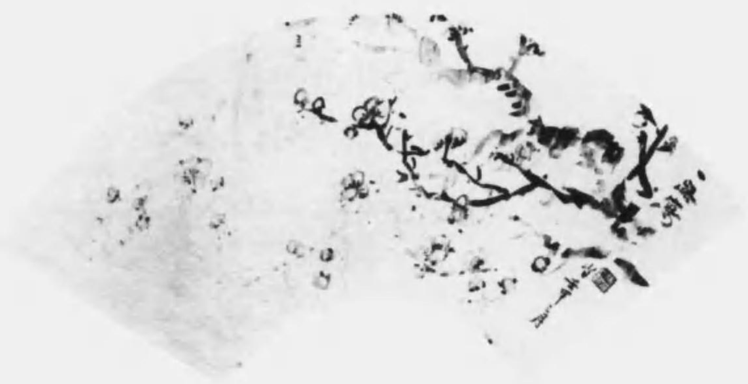
自分は好んで山水畫を作るが、實は、如何に山水を畫くべきかの方法は判つて居らない、又自分の畫を、あとから見てどう云ふ方法で畫いたか、覺えても居ない、況や六法をや。從つて古人の畫を臨摸する事も、極めて拙で、且

これを好まない。然し一度煙霞に逍遙して其興趣の胸憶に滿つるに及び、之を墨に潑するや、知らず識らず畫らしいものが出來上つて來る

癸酉六月、新綠を追ふて、上州下仁田の奥山に遊んだ。

凸兀たる山容は名僧の如く、奔湍の溪流は智識に似て、天より地より我に向つて、如來の眞法を演說する、誠に是青天空下の禪刹で有る。歸來此畫を作つて以て天師に答ふ。

未だ以て第一義を去る事遠く、允許元より期せず、前途の遼遠を憶ふ。



(3) 朧月梅花便面

畫梅に際し、內省させられた事は、一再に留まらない、かつて或知己の期待に副ふべく、わざ〳〵寒い日に、梅林の寫生にまで出かけて、大いに發奮して、畫いた事が有つたが何としても、うまく行かなかつた。

其時つら〳〵其原因を反省した結果、これは全く自分が、不知の間に、筆技の末節に拘泥して、所謂畫家者流のあとを追ふて居たのに氣が付いて、只獨り慚悔の冷汗を流した。

其心の疵のまだ生新しい折に、たま〳〵瑞芝堂店頭のウキンドに、清人虛谷の所畫墨梅の便面一幀を見るに及び、卽ち忽然として得る所あり。走り歸つて、卽時同じく便面一幀を寫して自ら快然たり。

地下の虛谷以て如何と爲す。奕世異朝、君を知る人あるを喜びて可なり。

(4) 湖邊薫風

毎日東京の眞中で商買に追ひまわされて居る自分には、稀にする旅行も、此上なき歡快を覺える。

壬申歳、若葉に風薫る頃、宿年の願望をこゝに果して、琵琶湖上遊覽船中に客となつた。雨岸の風光書圖の如く、滿船皆是行樂の人、微風面を吹き、漣波媚を寄せて船に迫る、誠に地上の樂園である。西天近く逢坂の山、稜線緩やかに我を招く、そのかみ蟬丸太夫の高樓のあとは、たづぬるに由も無いが、三位源博雅に、其秘曲を傳へたる昔談りの心境には、直に介入を許される樣な氣持がする。

傳ふる者と、會得する者と、二つの魂の歡喜、以心傳心の佳境は、佛法と云はす音樂と限らず、皆此れを彷彿せしめて居る。嗚呼我拙技何れの日か此恩寵を享くるに足るべき！

此樣な事を考へて居る間に、船は人絹工場の發展に、昔の晴嵐の勝景を偲ふに由なき、粟津の沖を、瀬田を指して進んで居た。

(5) 石山寺懐古

石山寺は、秋月を以て聞えてゐるが、上代の堂宇今尙存し、鬱蒼たる林木、甍に映じ、懐古の情、胸に迫る新綠の期も、亦甚だ佳なるを覺ゆる。

西國第十三番の觀音を伏し拜ろかみ、源氏の間に座して徐に書院の扉を開き、遠く鈴鹿の山々に眼を放てば、興亡千年の歴史も、忽忘れて、女性的平和の自然裡に、包懐される。

惟ふに、藤原氏の盛期は、世こそ異なれ現時と同じ樣な、文化の爛熟期で有つたであらう。　當時の社會生活の頂點に、活躍した紫式部は、一面秋の夜の透徹した月の樣な、内生活を、持つて居た人では無らうか？

寺の執事に乞はれて、觀音の書三枚殘し去つて月見堂に、其眺望を書冊に收めた

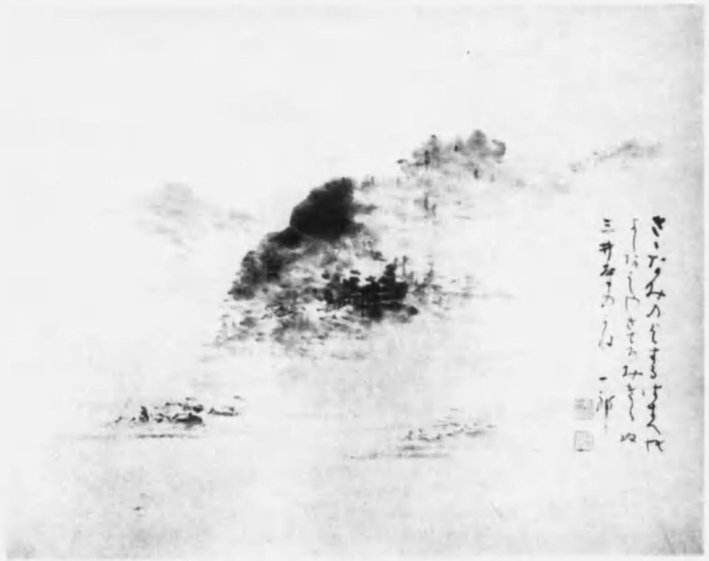
(6) 渡頭舊蘆

蕭湘夜雨などは、八景書題中の尤なるもので有る。近江八景の中で「唐崎の夜雨」を稱せられて居たが、昔は知らず今は雨を聽けそうな境地も見えない。

名松の朽ちたる殘骸が、其有りし日に謳はれた雨を、今は屋根に蔽はれて、磨蝕の餘喘を永からしめんとし、傍ら子松か孫松かの枝を、飴の樣に引きのばさんとして居るのを見て、事の善惡は知らず、何とも云ひ樣の無い、人間の惡戯を思ふ。

去つて船を索めて湖岸に出づれば、微風若葉を搖がし、小魚舊年の蘆間に游ぶ。

今日より昨日、老時より少時、憶ひ回らせば、永からぬ一生、百世必ずしも久しとせず、而も其間、人間記憶の連續は、必ずしも精確なる事能はず、天智天皇の志賀の宮居のあと、此處より程遠からぬ由に聞けど、そのかみの事などしのぶに由もない。



(7) 三井寺の晩鐘

國史を繙く毎に、心外に感ずるのは、僧侶の鬪擾沙汰である。其の當時の社會狀勢の上に相當理由も有つての事であらうが、その中には心ある知識も居たで有らうに、大勢の渦中、矢張り止むを得なかつたものであらう。

今の世とても之れに類する。選擧が何うの、教育が何うの、至る所の行きつまりを、どうする事も出來ない。有識の士も無いではないのに。

琵琶湖は、昔ながらに小波を寄せてはかへし、三井寺の晩鐘は、人間盛衰の波上を越えて、今現に自分の耳朶を打つて居る。

人間の說く佛法は、時に隆替が有つたが此鐘聲を聞いて、菩提心を搖りさまされた者は、その數幾何で有つたであらう？

聊水墨を紙上に弄し、濁世逃避の術を學び、併せて靜思室中、其餘韻を聽かんと欲する。

（8）

叡山時雨

叡山は坂本口からケーブルカーを借りて登つた。

山河は舊に異らず、伽藍尚朽ちざれども其昔東瀛隨一の學問淵叢として、幾多の高僧碩學を輩出した當時の盛況は今見るべくもない。根本中堂に千年不滅の燈明は拜し得たが、心傳の法燈を今誰にか問はん。

堂前の標柱により、紀貫之卿の墓墳あるを知り、他所は兎もあれ、こゝのみはと又路を返す。訪ふ人も稀なりと見え雜草細徑を塞ぎ、案内の老婆も途を誤り、折から降り來し雨にそぼぬれて、たどり着きし松山の中、熊笹生うる所に、さゝやかなる墓石の、石地藏と併立するを見出した。

木工頭紀貫之朝臣墳と誌す。近傍碑石に事を誌しあれど、又一しきり降りいでし雨に匆々引きかへす。歸來記憶のまゝを寫して、以て同好の士に示す。

（9）

筍

よきとものの一に「物くるゝひと」と兼好法師も云はれて居るが、いくら物質の當世でも、自分の好かない人から貰ふた時は、あまり嬉しいものでは無い。厚き友情を添えて節物を贈り來しなどは、此上なく珍重のものである。

眞の食味は味覺よりも、この風情の方がよほど重要な條件で無ければならない。

松茸を小籠に羊齒の葉布きて、遙々と贈り來しを、鼻うごめかしながら、取り出すなど、節物中の白眉ともいへるが、これを書にする時、どうも松茸は粹すぎて何となし見苦しきものがある。その點は春の筍の方が、餘程に上乘といへる。

一日、多門堂主人、西郊知人の邸に、親ら鍬とりて、土の香新しい筍を、持つて來て呉れた。心嬉しいまゝに書にもかきたし、喰べても見たし、お蔭で一夕一朝追ひ立てられる樣な忙しい思ひをした事であつた。

(10)

逢坂山

藤原末期から、鎌倉初期にかけて、人心の異常なる不安の衝動から、佛教が改めて、見なをされ、名僧輩出して、遂に眞宗・法華の二宗の樹立を見た事など、現在の時世に、思ひあてゝも、遇然では無いと思ふ。

明治維新に、世界の大勢に目醒めて以降國を擧げての發奮努力を以て、兎に角世界的レベルに押し登せて來た現代に至るまで、頭初の社會的理想は次から次へと實現されて來た。幻滅の悲哀といふべきか、登りつめて見た時には、世界は既に物質文明の懐疑時代を現前して居る。

再び佛教を見直をす時機となつた。

最早や萠芽はのびて居る。天理教・皇道大本・一燈園等、夫々新たなる人心の歸仰を得て、發達しつゝある。

中にも一燈園の西田天香師は、佛教を現代的に體讀して居る點に於て、最も自分の腹に、ピッタリ來るものがある。

壬申五月初めて洛東山科の光泉林に至りまのあたり其淨業を視る事を得た。

(11)

艸聖

農村改善の講演に聘せられた天香さんに隨行して、丹波の國の山村に行つた事が有つた。

村の觸れで、全村鼎つて、小學校の講堂に、集つて來る程だけ有つて、農村文化の程度は、現時の社會理想通りに、發達した村と見て差支ないと思ふ。かるが故に農村經濟の行き詰りにも卒先して到達した譯で有るし、それを改善せんとする全村一致の努力も、この文化の賜物と云へるであらう。

役場の應接室で、晝飯を饗せられ、天香さんと村長さんのお話を傍聽しながら、見るともなしに、自分の借りた藁草履に目を留めた。

これは又何と美しい草履であらうか、キリッとした緒のすげ方、鼻緒に卷かれた紺色木綿の藁との調和、すつかり、藁草履の美觀に魅せられてしまつた。

手造りの藁草履！醇風美俗の根元、農村經濟の鍵、萬事の方策は足もとに有る。

天香さんの下座の教へも、この味と肯かれる。藁草履を書く所以である。

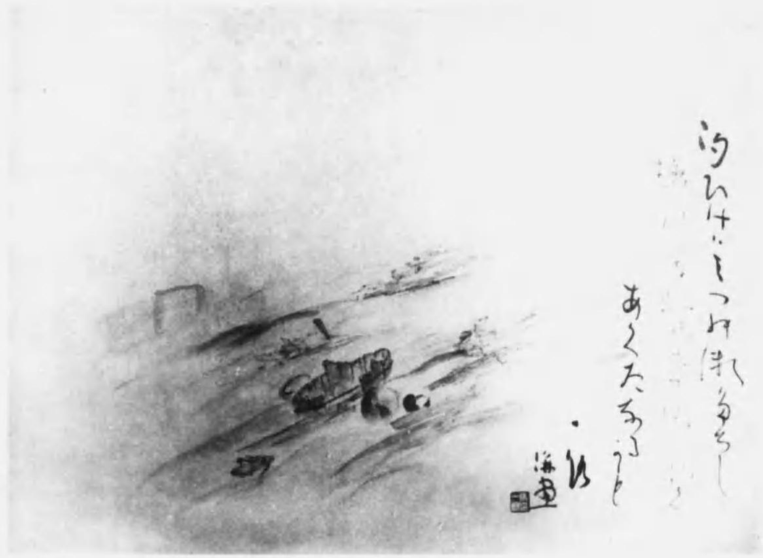
(12)

流轉

京橋の住居から、丸ビルの店舗へ、降つても照つても毎日通ふ、所謂都心の生活で、自然美には頗る惠まれない自分である。然しその途中でも、鍛冶橋附近は、都會的風物に稍富みて、朝夕心を慰めるに足るものがある。

魚も住めなくなり、やがて子子もわかなくなつた汚濁の水にも、青葉や煙突の影を宿し、荷足船を浮べる力は持つて居る。四季の折々、幾度か此處で歌を詠み書題を發見した事か！　落潮の時など非常に流れの速いをりに、面白い程澤山の芥が流れる事が有る。

底ぬけ桶、空俵、西瓜の腐つたもの、ちぎれ草履等々、色樣々なる老廢物、都會生活の種々相の行末など思はれて、觀者の胸を衝く事しきりである。



(13)

陋巷情趣

一
ゆくみづの　かくとは知れど
日や月の　ゆくを惜しめど
かりそめの　病の床に
永き日を　あだに過ぐすも

二
またたのしきに　窓は白めど
朝まだき　鶏も聞えず
都には　あかねもさゝず
巷には　影のみあはく
針金の

三
十重に二十重に　續く甍に
見るかぎり　照りかゞやきて
夏の日は　爆音ひゞく
リズム無き　かゝるとてしも
末の世は

四
目まぐるはしき　雲こそよけれ
空にわく　かはる景色の
たちまちに　居ながら遊ぶ
山や谷　乏しさ知らず

五
旅路とて　迷へる鳥の
都にてだに　過ぎりしあとに
とき折りに　物一つなく
二つ三つ　心は走る

六
大空は　人はどよめき
もの思ふ　空まで焦がし
はてし無きまで　稀なる月を
夕されば　暫し相見て
街の灯は
みる人の
小窓より
時惜しむかも

(14)

事なかれ

「可愛い兒には旅させよ」

キャンプ旅行を志したる倅を大いに推賞して、出發させたあと、自分も矢張り、人並に親心を持つと見えて、心配するといふ程でも無いが、毎日指折りして其行程を、數へて居た。

今宵我が兒の草枕、尾瀬か、赤城か、老神か？

其無事を祈る心をかみに

(15)

秋　妍

色彩の美觀は、花に過ぎたるはないが、果實もそれに劣るものでは無い。まして色香の外に更に味覺をそゝらるゝに於てをやだ。

尤も植物の側からすれば、花の蜜と果實の漿味とで、時期を分ちて、大小二種の動物を使ひ分けをしてゐるので、萬物の靈長たる人間も聊か恐入らせられてしまうが、いくら口惜しくても口欲しさには替へられず、矢張り果實には、何とは無しに、延年益壽の樣な目出度い、嬉しさを感ずる。

柘榴の實の形と色、あけびの自然の薄紫など、みても見飽かぬ美しさである。

此小幀は、必しも此の眼福を留めて全きものでも無いが、自己胸中の耽美を漏らし、題して秋妍といふ。

(16) 大樹秋酣

自分は元來、黄色と臙脂色とを好くらしい。露冷やかを覺ゆる朝の、秋海棠の花、秋晴の碧空に映する銀杏の葉などは、たまらなく嬉しい色である。

金錢も銅臭ふんぷんでは、恐入るが、山吹色の黄金ときけば、滿更耳さはりでも無い。

金貨の色には、お互日本人は親しみがうすいけれども、箔置きの古い屏風の落着いた色、或は、古銅佛の渡金に殘る燦たる金色などには、實に莊嚴なる美を感ぜさせられる。

壬申晩秋の頃、娘の看病中の一日を強いてぬすみ、侍と共に武州御嶽に登つた。秋の山は勿論惡い筈はないが、其中で一番嬉しかつたのは、途中一本の大銀杏の全山を明かるくする樣な大美觀であつた歸來、この黄色い歡喜を、是非書に謳はふと企て、幾度か試みた。然し實景に卽した其當時は、どうしても書にまとまらなかつた。

期月の後、寫意を以て、稍會心の此一幀を得て、水墨書中に黄彩を感じ、聊一夕の歡快を紙上にのべ得たものである。然し御嶽で得た、銀杏の莊嚴觀は遂に逸し去つたうらみはないではない。これは我が筆技の未熟に歸せなければならぬ。

(17) 送節野趣

東京生活に、一番野調の自然味を點ずるものは、孟蘭盆會の草市であらう。石疊む都大路にも、艸の香の漂ふまこも莚に茄子南瓜、ほうづき、さては可憐なる紅い蓮華の蕾、色とりどりの供物、いかにも艸葉の影の、み靈たちの、よろこびさうな物ばかりだ。紺飛白着た、手甲脚袢の田舍娘の賣子も見えて、唯物史觀からこの夜ばかりは解放された氣になれる。

をがら火を焚く古調などは、何としても慣習から消し去りたくないものゝ一つである。「お迎ひお迎ひ」と呼び來る人足さん達に、お盆のまつりの殘骸を持つて往つて貰ふ事は、都會情調の一つであるが、これは兩爲めになる善い習慣である。いつの頃よりの習はしであるか、私等田舍出の東京者には判らない。田舍出といへばまだ〳〵お盆樣を河に流す人も有ると見えて、外濠の緩慢なる流れに浮きつながれつする供物に、幼時の淡き哀愁を呼び醒す。お盆は矢張りうれしい行事である。

(18)

つはふき

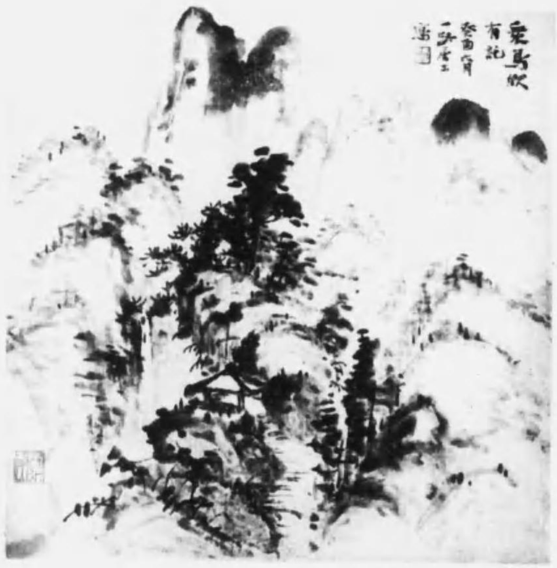
「もののあはれは秋こそまされ」と古人も云ふて居るが、ものの憐れを感ずる位嬉しい事は無い、秋はその點に於て多幸の時機である。

佛を見奉るのも、詩も歌も、乃至は書でも、物のあはれを感ずる時機の産物であり、天地に來する機を得る關門である。心の合ふた友と、肝膽相照し、生の歡喜を味ひ得るのも同じくこの時である。

つい、話の面白さにつられて、段々に長座し、日の短きを嘆じ、盡きぬ名殘を、辭し去る時のさびしさは、人間無上のうれしさでないか！

夕風冷かに、稍興奮の顔をかすめる時、飛石の際に咲いた、つはふきの花などは特に心にクッキリ印象するものである。

此の寂しい嬉しさ、心根弱き、眞の勇氣を、つは蕗の花に表徴したいと思ふ。



(19)

水響搖翠

自然を大觀し、遠觀したものは、山水畫となり、近く此を手中に扱ふたものは、多く花卉の畫となる。更に直接人間の行動を扱へば人物畫となる。

東洋畫は、多く山水中の點景に人物を挿み、西洋畫は、人物畫の背景に、山水を用ふ。

何ちらも自然である事に、かはりは無いが自分は自然と云へば直ちに、山水の煙霞に憧憬する癖がある。

今年癸酉の夏の暑さは、又格別であつた。而かも丸ビルの中の、風とほしの惡い陋室では、實にたまらなく暑い事もあつた。

一日あまりに暑いので、筆を採つて、畫中に涼を追ふた跡が、即ちこの畫幀で有る。自己には、一時忘暑の功果は確かに有り得たが、果して觀者に涼風を頒ち得るや否や？

(20) 拈華一輪

一體、東洋書は西洋書に比して、道具が不完全であると云へる。南書に至りては殊に然りで、無理にも不足の道具に甘んじて、形態の表現よりも、氣韻生動を第一として終止して居る。

書を習つた事の無い自分が新しい一つの物象を書かうとする時には、可なりの無駄骨が折れる。唯一本の筆で墨一色で絵抹の感興を表現し得るか、而も筆數を使へば、使ふ程書が墮ちるのだから始末が悪い。幾分か自得する所あつて、然る後に古人の法に對する程、幾多先輩の努力の結晶の貴重さを思はせられる。

娘の病氣が、增々進んだ二月頃、西田天香師御夫妻から、病床の慰問に、色香の美しい、薔薇の花を賜はつた。その時娘と共に、此上なくよろこんで、どうか、此の花を凋ませたくない念願に驅られて、紙上に其生彩を證せんとした事であつた。書きも書いた隨分澤山書いて段々に省略を會得した。數日間は、全くこれに熱中した。未だ意に滿つるには至らなかつたが、うづ高き百數十枚の反古の中から、此一枚を選んで、辛うじて落款したわけである。唯、師の恩情を紙墨に留め得たるを幸とする。

(21) 光泉林

疎水を客舟が下る。近江八景を觀賞して、三井寺下から流れて見やうと云ふ人である。暗い隧道を三十分過ぎて、明るみに出ると一號橋、あれといふ間に二號橋。そこが光泉林のある處。翠滴る山を負ひ、碧々として流るゝ此の疎水に沿うて、新建の二棟の家をつなぐ古風な門がある。門標に小さく「財團法人光泉林」と銘してあれど、疾く流るゝ船の客には判るまい。建物に續いて石の玉垣がある。あれよと云ふ間にまた山の麓を流れてゆく。光泉林はかゝる船の上り下りを毎日送迎してゐる形である。時々往復する船の客のはなしを聽くに、

甲　妙な家が出來たではないか。

乙　別莊か？

丙　お宮だらう、玉垣が續いてあるから。

丁　門の形は寺でないか。

甲　がたん〳〵と印刷の機械の音もするからね。

戊　君等知らんか、一燈園だよ。

乙　一燈園があんな家にすむものか。

丁　隨分澤山人がゐるよ。

丙　挨拶するのによく合掌してゐるでないか。

己　乾度何か修業する所だ。

乙　子供も澤山遊んでゐるよ。

甲　それで妙な家が出來たと、おれが云ふのだ。

此圖、昭和七年五月初めて此處に至りて寫す所に係る。

「黎明のさゝやき」から。

(22) 愛善無怨

一燈園は諸宗の眞隨を禮拜すると云ふ。其本山とも云ふべき光泉林に來て、此中の本堂ともあるべき、愛善無怨堂の神座に額づき、圓窓を通じて、日光を拜した。此處まで來て改めて、日光を見直した。

然り　み光を！

惟ふに過去千數百年の間、我國民の精神生活の大部を支配して來た佛教は、既に因襲の久しきに依り、あまりにも形態化してしまつた。今や、改めて此の佛教を見直すべき時機ではないか。

愛染無怨堂の法燈は、既に、大神宮・叡山及び廣隆寺三箇所の火を集め嗣いで、新に烱烱として點ぜられて居る。

嗚呼人心未だ地に墜ちず、佛恩未だ空しからず。幸に後來無盡の法燈を受持して懈怠すること無からんには、末世に佛國淨土を現ぜん事必ずしも不可能事に非ざるをおもふ。

(23) 懸崖松風

娘の病を養ふよすがに、且は又有り難き御佛の道を知らすべき術にもと、壬申八月娘と伴ふて、再び光泉林を訪れた。

丁度その頃、「一燈無盡」の新刊を控へて、其表紙の考案を、回光社から依囑された。

書物の裝釘などは、全く無經驗なので、一旦は辭退したが、一燈園の刊行書類は表紙の好惡など問題では無いと聞かされてつい心安くなり、卷頭掲出の古歌「よばゝよびよばねば呼ばぬ山彦のこたふる聲はよふ人のこゝろ」の歌意を忖り、天香師の筆墨を借りて懸崖松風の圖を作つた幸に天香師の歌賛を得、影印して「一燈無盡」の表紙となり天下に公行された。

歸田園詩意圖

書に賛をするといふ事は、何時頃から發達したものか知らないが、東洋書殊に南書に於ては、不足なる道具を用ひ、形を寫すよりも、寫意を主とする關係上、書賛を待つて始めて書の目的を充す場合が多いので、賛は特に重要性を持つて居る南書が支那に發源したものであり、書賛はつとめて簡結を尙ぶ必要上、多くは支那の詩文を題する習慣である。加ふるに日本人は一體器用である爲か、支那の詩文を可なり善くする可能性を持つので、書賛は漢詩漢文であるべき樣に思はれて來たが、支那人に和歌和文の大家が出ないのに想到すれば、日本人の支那文學が支那人に劣ると見られても無理のない事である。

自分はつとめて、國文を以て書賛にしたいと思ふて居るが、支那の詩文には全く敬服するものが多いので、古來の傳統も甚だ無理でないことを思ふ。

此頃陶淵明の詩集をよみ意、酷だかない、景仰措く能はざるものがある。試みに其歸田園詩中の意をとりて、此圖を作り、聊古人の意圖を付りて、以て現世を觀ぜんとするものである。

麓莚精舍の圖

煩惱具足の儘に、形を宇内に偶する人間が兎角この世を住み憎がる樣に、出來て居るのは、何か自然の深い攝理が有つての故に違ひ無い。佛の道はこの點をとらへて色々其解脫の方を講じ敎へて呉れたものでも有らうか？

佛敎を兎角悲觀的の樣に云ふ人が有るが何時も悲觀のドン底に座するだけの覺悟で居る事が出來たなら、恐らく其先きは何事でも樂觀より外は無い筈である。大死一番などと云ふ事も、この事を云ふのかしら。

洛東蹴上日向大神宮の境内の谷間の低い土地に、細やかな方丈の精舍が寂かに建つて居る。こゝは昔刑場の趾にて先頃までは乞食非人の小屋などありし由、其人等に混りて、天香師が、此所を路頭托鉢の發足の地點とされたと聞いてゐるが、其心境は自分にも、稍うかゞひ知れる樣な氣がする。

かつての不淨の地、今現に寧ろ聖地化したるを視る。見よ人間淨業の歡喜を！

(26)

恒春園（蘆花氏舊宅）

今から二十年も前の事で有つたか、これも今は故人となつた友人と共に、久地の梅林を探つた後、吹きすさむ北風に向つて、玉川に沿ひ、千歳村の方へ歩を運んだ。是は若いその頃、耽讀した「みゝづのたはこと」の蘆花氏宅を、よそながらでもよいから仰ぎ見たい爲めであつた。然し愈其村に近づいた時には、最早氣がかはつて居た、なぜ中其樣な所は見ない方が善い、會はん方がましと、かゝ樣に思ふて急に歸途に就いてしまつた事が有つた。蘆花氏歿後その親戚にあたる川瀨君が、度々所用で德富邸へ行くので、その都度色々とあとの樣子を聞かせられ、一度は行つて見る氣に成り、壬申若葉の薫る頃二人で出かけて、留守宅及び其附近を一時間ばかり見物して廻つた。本に書かれた當時から二十數年も經つた事で有らうから時世の變化は勿論であるが、此あたりだけは、武藏野の隱棲といふ氣持が大部濃厚に殘つて居るのが嬉しい。況や人のなくなつたあと等は殊に感慨深きをや。しかも故人は何と云ふても、此の世に大きな存在であつたし、自我をとほしただけでも羨ましい處があつた。

此圖半截の宣紙に二本を試み、一本を未亡人愛子女史に贈り、一本に此頃自詠の長歌を錄した。

愛子女史のおくり來し歌に、

「みそらよりこの世戀しと思ふとき、うかぶ我家のまぼろしは此れ」

(27)

驟雨一酒

癸酉八月、阪東第十五番白岩の觀音に參詣し、更に榛名山麓を水澤寺に至らんとして、途箕の輪を過ぐ、殘暑烈日行路崎嶇、夕暮近く白河をわたる時、驟雨一過のあとの遠村近樹、榛名の山頂遙かに白雲に入り、恰も畫圖に似てゐる。此邊我が生鄉高崎を距つる僅かに三里、而も未だ此の佳景あるを知らなかつた。卽ち矢立を取り出して、此一幀を收めた。

對岸斷崖上松林の勝地は、我が舊友の居邸の在る處、遽かに舊情の發露に驅られて、遂にその門を叩く、生憎主人不在、家人我意を解せず、立ち出づる門前に村童我を怪しみ、白堊の屋壁は徒らに白い。

顧れば、紺木綿のモンペイ袴、無帽弊履の自分の姿である。未知の人々の訝り見るのも無理はない、罪は此方に有る。

去つて乘合自動車の便を借りて伊香保に宿す。

(28)

過崔處士林亭詩意圖

白眼守田先生は、舊熊本藩出身の高士である。數年前和風堂店頭に於て、知を得てより、交遊舊知に異ならず、爾來未だ東脩の禮は執らないが、我が宗師と仰ぎ、慈父と慕ふ先輩である。

かつて一日、王摩詰過崔處士林亭詩を示して予が寫書を索めらる。卽ち欣んで之に從ひ、書稿數枚を試みたが、其際遂に成るに至らなかつた。

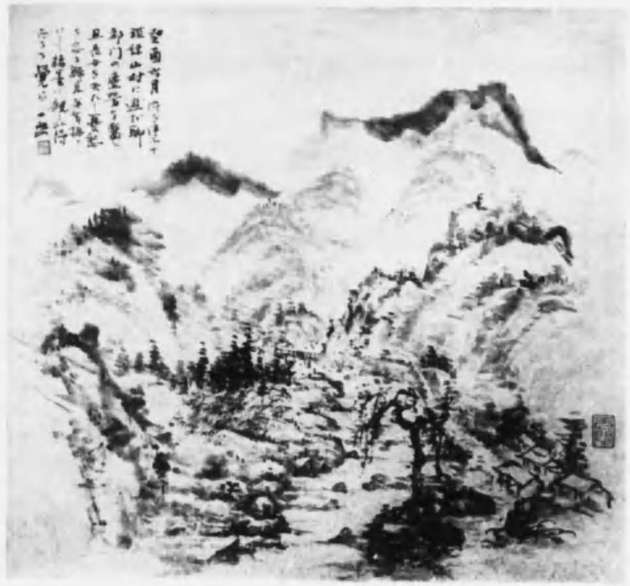
たゞ〳〵肥後先輩書畫展覽會の擧あり、予も亦先生に伴はれて此を見た。中に就き宮本二天の書は特に其の機鋒に於て得る所多く、更に矢野良勝の同じく唐人詩句を書きたる長卷を見て書機を得、卽夜此一小幀を圖して、先生の正を乞ふた。越へて二年、今次裝成り、擧示せらるゝを視るに、先生の題贊を得て、拙書はじめて稍見るべきを覺えた。先生の知遇を謝し、併せて事由を誌して自ら警しむる所以である。

(29)

水聲洗耳

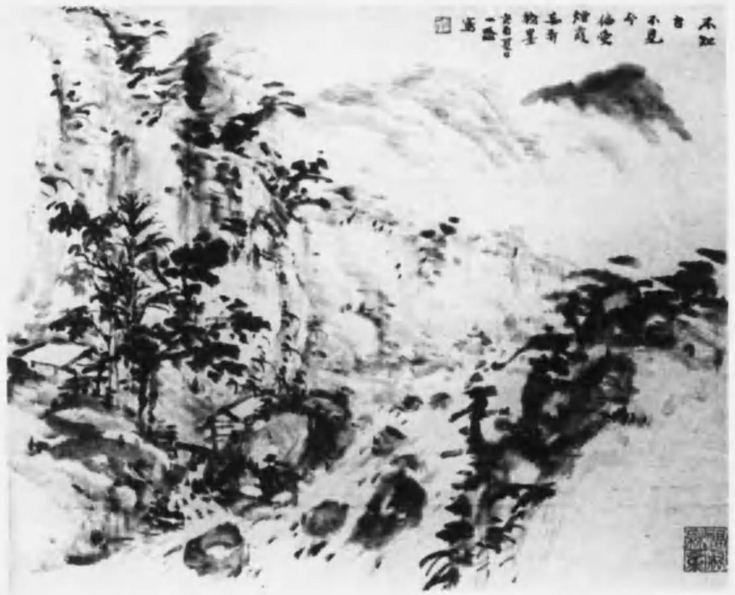
はたちの妙齢を落花と共に散り失せた、いとし己が娘の七七忌に、鄉里墓所に埋骨を了へ、一には其菩提を弔ひ、二には積る憂愁を煙霞に散せんが爲め、長子辰雄を伴ふて、癸酉六月、かねて幽邃を以て聞えたる、上毛黑瀧不動尊に參詣を志した。高崎より上信電車の便を借りて西方約十里下仁田に下車、これより徒步三里の行程、常に淸流に沿ふて上る。兩岸の翠綠滴らんとして山鳥うたひ、谿流潺々として河鹿なく、崖下流水を堰きて水車を動かし、杵音の靜寂を破るものは、此邊の特產物蒟蒻粉の製造所である。

生憎今日は行旅第一の用具矢立を取り忘れ、下仁田の町にて用意したる墨壺の、墨汁は臭氣に堪へず、筆は弱腰にて物の用に立たず、且行路漸く難やみ寫景を斷念して養心を主とし、歸來京橋松川居に於て、寫意以て此圖を作り聊煙雲供養を遂げ得た。



(30) 幽峽忘憂

我友香光道人、氣韻高邁篤信にして六法に精通し、山水花卉翎毛善くせざる無く、殊に其山水に支那南畫の正宗を祖述する點に於て、古今に多く其の比を見ない。自分は常に、我畫に宗師なしと稱すれども、道人薫染の結果たるや論なし。余畫に志して此處に七年、不敏にして未だ章を成さず、法を辨ずるに至らざれども、此濁世に處して、喜怒哀樂一に之を紙墨に托し、以て我情を放つに足り、日々の業に安んじて、老の將に近づかんとするを知らず。誠に畫は我が爲めに、無上の伴侶にして且自己鑑戒の鏡である。此畫、黒瀧不動尊參詣後、其道途の景を想ふて、京橋松川居に於て畫く所、もとより未だ足らずと雖も、意に任せて禿筆を驅り、半年の憂悶を煙霞に消散し、世態の暗影を一時に忘る。只これ机上遊戯に非ざるなり。



(31) 清流洗心

畫は、一氣に成るものあり、又數日或は數十枚を費す事あり。一氣呵成のもの、必ずしも劣るにあらず、苦心練成のもの又上乘とは限るべからず。要は專心興趣の湧くものありて、畫技を忘るゝに在る。心に形して手に形せざるものは、たとへ拙くとでも見るに足りるが、手至つて心足らざる畫は如何に巧妙と雖も畫品下りて見るに堪へない。一度本來の興趣を失し去りて、畫に即する時は直に畫技に墮す。誠心せざるべからざるは此點に存する。下仁田に遊びて後、店頭にて、業に從ふの間胸中の畫興勃然たるに驅られて、紙墨選ぶに暇無く、販賣台上に宣紙の外包紙を展べ、記帳の宿墨を潑して、殆一氣に此圖を成した。

心、水聲に聽き、氣、綠蔭を追ふ。巧拙元より關せず、況や他人の毀譽をや。

一路居士拜寫

觀音尊像施畫

和風堂店頭に掲出して、御希望ある方に無料で戴いて貰ひます。（唐紙色紙大）御遠方の方は、送料二錢御封入和風堂へ御申込の事。

此外、絹本、半折等に揮毫を望まるゝ方は材料費丈、丁戴致します。

丸ビル御經會

會費不要參會隨意

主催 丸ビル 和風堂

期日 毎月第三木曜日午后六時

會場 丸ビル八階集會室

御經 觀音經、心經、壽量品

最嚴肅に、極めて敬虔に御經を、あげる事は如何なる有り難い御說敎を聞くよりも、煩雜なる頭腦を整理し、理屈を離れて、功德が多い事です。何方樣も、此丸ビルの森嚴なる道場に御集り下さい

有漏集 一路居士うた書 價金一圓

昭和六年より七年春に至る一路居士の作書中十二帖をコロタイプ精印に附し和歌百八首を添ゆ

香筆墨
文房具
揮毫用紙
色紙短冊
風雅便箋、封筒
佛經、念珠
佛具、繪の具
其他

東京驛前
丸ビル二階二八三
和風堂
電話丸ノ内四三六三九番
振替東京三一七二二番

昭和八年十一月十五日 印刷
昭和八年十二月十五日 發行

價 二圓

著者 京橋區實町二丁目四 馬場一郎

發行者 麴町區丸ノ内二丁目丸ビル二八三 和風堂 馬場一郎

印刷所 岡庭光藝社

終